

会員のひろば

■ 青春を置き忘れた街

精華台1丁目 丸山真人

シルバー会員の皆さまの青春といえば、1960年から1970年代だと思いますが、僕はその頃からいまだにアイビー・スタイルを続けている根っからのアイビーファンです。

「青春を置き忘れた街」という歌詞がありますが、僕の場合は大阪・梅田です。

僕はアイビー・スタイルで毎晩のように、その喫茶店でたむろしていました。

そうこうしているうちにバンドを結成したくなって、常連ばかりで4人編成のブルーグラス・バンド結成、練習を重ねて梅田のライブハウス「テキサス」と「チャーリーブラウン」、そしてミナミの現在のアメリカ村にあった「エルパソ」でハウスバンドとしてやらせてもらったのです。

時々、野外イベントなどや結婚式にも呼ばれました。

その頃は「VAN・JACKET」というアイビー・スタイル専門メーカーが石津謙介社長の下、全盛期だったのです。

僕は石津謙介師を神と仰ぎ、リスペクト。結婚するならVAN・JACKETに勤めている女性と心に決め、それを実現。今の家内です。僕たちはVANの服を着て梅田や心斎橋、京都の河原町を闊歩(かっぽ)していました。数々の武勇伝を残しながら、あい変わらずアイビー・スタイルとブルーグラスの両輪は続く……。

青春を置き忘れた街・梅田は今も変わらずにぎやかに人々が行きかっています。



■ 保育士と園児たち

精華台3丁目 横山英己

私の保育士や園児たちとのまじわりはシルバー人材センターの交通整理の仕事が始まりでした。その仕事は私の体調不良で3年くらいで終わり、今は保育園が新規に始めた月1回程度のシルバーと園児の交流会に参加しています。

保育園に行くようになってまず感じたのは園児たちのかわいいこと、母親や保育士にあまえるしぐさにもうメロメロです。また保育士の仕事ぶりのすごいことにも感激しています。この暑いなか園児たちと一緒に飛び回りながらも園児たちがけがをしないように見守っているのです。また、飛び回っていると体がふれて転んだりしてすり傷をする時もあります。たいがいの園児は母親に「A君が倒した」などと言うものですが、保育士が見ていると「ちょっと体が触れただけなのですよ」と母親に説明して「園児同士」「母親同士」のわだかまりが残らないように、気を使っているんです。

お泊まり保育もあるんですね、よく布団を干していましたよ。

保育園から運動会への招待があり、参加させていただきました。年少組の、あの小さな園児がやるんですよ、みごとに。保育士の根気と愛情がやらせるのかな。



紙飛行機大会、こま回し大会などわれわれが子どものころにした遊びを一緒に楽しんでいます。こまを回すのはまずひもを巻くのに一苦労します。何回も挑戦して回せたときの満足そうな顔、回せなかった園児…。でもいつかきっと回せるよ、と励ましています。私が手のひらの上でこまを回してみせると、もう一回、もう一回と大喝采なのです。

ある日、保育士や私たち大人が見守る中、園児に直にのこぎりを使わせて小枝などを切らせているのを目撃、「けがをさせては困る」ということで小刀などを使わせない今時の風潮の中で、この保育園のやり方に今更ながら感動しました。

保育園から園児と一緒に食事に誘われたことがありました。「ここに座って、ここに座って」とか「おじさん聞いて、聞いて」とか座る場所やおしゃべりに夢中で食事どころではなくなるのもちょっと困りものですがこちらとしては感動モノです。最近では町内で買い物をしていると小さい子どもや若いお母さんから「シルバーボランティアさん」と呼んでくれます。いいもんですよ。子どもたちから若いエネルギーをもらっています。

入園したころには、「おはよう」と声をかけたら、お母さんの裾に絡みついていた子が、お別れ会では、「サッカー選手になる」、「パティシエになります」と言えるようになっていくんです。人生の最初の一步を手助けする保育士と園児たちとの素晴らしい命の語りを見たとような気がします。小学校の入学式に行く盛装で誇らしげなお母さん、その母親に手を引かれ、真新しいランドセルを背負った一年生、そんな風景が目に見えます。来年も再来年もそんな風景を見たいものです。